

#### 第4回 山・川・海の連続性を考える県民会議 取組紹介②

利根川調整官：皆さん、こんにちは。国土交通省京浜河川の利根川と申します。

まず、京浜河川ですが、横浜市鶴見区にございまして、多摩川、鶴見川、相模川、それから沖ノ鳥島、これまでは3河川1海岸管理しておりましたが、今年度から西湘海岸直轄化になりまして、3河川2海岸の管理をさせていただいている事務所でございます。

それでちょっと私的なことで、誠に恐縮なのですが、実は皆さん、発表の中にありましたが、2007年の台風9号のときに私、京浜におりまして、この災害時に県の皆さんと災害の原因、それから対策、それから直轄化に向けての検討を半年ぐらい続けておりましたが、6年、京浜を離れておりまして、辞令が出まして、4月から京浜に行けど。何をやるんですか。西湘直轄化になったから、お前がやれと。何のめぐり合わせか、災害時におりまして、今度、立ち上げ時も西湘をやらせていただくという、私的で申し訳ありませんが、そんな人間でございます。

皆さんのあいさつにありましたように、2007年台風9号をきっかけに6年、直轄化に向けての動きがありましたけれども、今年度、26年、認可をいただきまして、国のほうでやることになりました。その辺の事業化の背景とか、保全対策事業の概要について、私のほうからご紹介させていただきたいと思います。

西湘海岸ですが、大磯海岸から二ノ宮海岸、それから小田原海岸、酒匂川の土砂によって形成された海岸で、これまでも酒匂川の土砂によって保たれてきた海岸でございます。このうち、私ども直轄で事業をする区間につきましては、大磯港から西に酒匂川の河口まで約13キロ区間を、私どもが事業化ということで実施させていただくことになっています。皆さんご承知のとおり、これまで、かつては西湘海岸、幅広い砂浜があつて、海水浴とか、ビーチマラソン、今でもありますけれども地引網とか、釣りとか、さまざまな利用がなされていた海岸でございました。今では、海水浴とかビーチマラソンとかがもうできない。宇多さんの写真にもございましたけれども、もう全く浜がないような所もあつて、散歩すらままならないような所もございます。

過去の災害ですが、1982年、1987年、そして2007年台風9号、直近では2011年台風15号と度重なる台風による砂浜侵食の被害が発生しております。皆さんの写真にもありました、宇多さんの写真にもありましたけれども、西湘バイパス、台風9号で1キロ以上、陥没しまして、復旧までに半年以上かかったという大被害です。下の写真は宇多さんと同じですね。金波の所の砂浜が一瞬にして、一夜にしてなくなってしまったというような被害であります。

ほかにも、小田原の小田原海岸でも大磯海岸でも二ノ宮海岸でも砂浜侵食、それから護岸の崩壊などの激しい被害が発生しています。これは平成23年ですね。西湘の、西湘パーキングの所の、やはり砂浜がなくなつたと。2011年です。これ、去年の越波の状況です。去年も台風が二つ来て、越波は発生している。大きな被害にはなりませんでした、度重

なる被害が発生しているということです。

01 : 50 : 27

先ほどご紹介にもありましたけれども、西湘海岸の持つ特徴がこの被害を大きくしているといわれています。図は、日本地図に駿河湾と相模湾と富山湾を図示していますけれども、白字が陸地です。赤字が急峻な海底谷です。図面を見ていただきたいんですが、100メートルとか、300メートル過ぎると、一気に深くなってしまう。もう岸から100メートル沖にはもうずっと、100メートル進むと、もう100メートル深くなっちゃう。そんな谷が迫っている3大急峻海底谷の一つが、ここ西湘海岸にあるということです。

これは今年、私どもの詳細な海底地形測量をした結果でございます。こちらが大磯の葛川です。こちらは大磯町です。この辺はまだ海底がなだらかですが、西に従うに連れて、谷が見えてきます。西湘二ノ宮インター、それから二ノ宮漁港の前ですね。この辺は300メートルぐらい先から、色が変わっているのは、急になっている所です。すみません、線は等深線図なので、目が詰まっているほど急になっていると見ていただければと思うんですけど。ですから黒くなっている所から急激に深くなっているのです。二ノ宮漁港の前とかですと、300メートルぐらい、その先は急ながけになっているということですね、海底の中が。さらに西に行きますと、国府津の駅ですね。国府津インターを上がって、森戸川の前面。ここですと、もう100メートル先から急峻な谷が迫っているというのが、私どもの今回の測量で分かりました。

これによって、二ノ宮の漁港の前とか、森戸川の漁港があります。こういう谷が迫っていると、波が減衰することなく、陸地に上陸してしまう。それによって、砂浜が一気にもっていかれてしまうというようなことが分かってきました。

もう一つ、特徴的なのですけれども、ここ酒匂川がありまして、酒匂川から常の流れは、この黄色い矢印でありますけれども、酒匂川からの土砂がこの沿岸流に沿って、土砂が大磯港のほうまで供給されている。これが普通の流れです。宇多さんの資料にありましたが、平成19年の台風9号は西のほうから、西っていうか、南のほうから迫ってきたので、南のほうから南、南東から北西のほうに強い流れが起きました。通常の漂砂ですね。沿岸流とは全く逆な、さらに長時間、強い波が起きました。それが今回、17号で大被害があった原因と、私どもは考えています。これによって、海岸線の減衰した幅とか高さとかを掛け算していくと、約42万立方メートルの土砂がどこかに行ってしまった。恐らくは、先ほど、ここですね、この谷の中に落ちてしまったのではないかと推定されています。

ということで、私どもの対策ですが、まず宇多さんの発表にもありましたけれども、護岸とか、堤防でガチガチに守って防災をするのではないと。昔あった浜辺、砂浜を広く作ることによって、防災機能を持たせて、常時は、先ほど利用がありましたけれども、通常の利用、皆さんが安心して遊べるような砂浜に戻したいという発想で、この保全事業を進めていきたいと考えています。

01 : 55 : 04

二つのメニューがございます。一つは、先ほどありましたように、大磯、二ノ宮の沖に、仮称ですが、岩盤型施設と。後ほどご説明いたしますけど、約3キロ間の、3キロの間に、突堤タイプの砂止めの施設を考えております。もう一つは先ほど言いました、海底谷が迫っている所ですね。そこに、その谷の中にレキが落ちないような棚、そういう施設ができないかというのを、その二つの施設を今現在、メニューとして考えています。

岩盤型施設。貝殻みたいなんですけど、実験でこの青いのでやったので、こんなになっていますが、実際はもっと景観に配慮して、材質もいろいろ考えて、作っていかうと思っておりますが、先ほど言いましたように平常時、青い所ですね。黄色い流れがあつて、この岩盤型施設は砂の中に埋もれています。ですから、砂浜を普通に利用していただく方には見えないし、感じられない。

ただ、台風が来て、高波浪が逆向きの強い流れがあつたときに、これがニョキッと出てきて、砂が流出するのを妨げるんですね。流出を、全部は止められませんので、ニョキッと出てきて、止められるだけ止めてやろうと。それによって、砂浜の後退を許さないというような発想で、今現在検討を進めております。これを、宇多さんのご紹介では300メートルの突堤だとかなり機能すると仰っていましたけれども、もう少し大型にして、約600メートルの間隔で設置していきたいと思っております。

もう一つ、流出抑制施設。森戸川の所に棚が、海底谷があるんで、この棚を少しでも緩くしてやれないかということで、これは本当にイメージですけれども、こんな棚を出してやって、少しでも砂の流出を抑制してあげる。それによって、酒匂川からの砂の移動もたやすくするし、台風時、高波浪時にこの谷に砂が落ちるのも止めてやろう。この二つのメニューを今現在考えております。

これは一方的に私が書きました。防災ガチガチの構造物でない、砂浜を広くすることによって、防災機能を持たせる。で、それは地域の住民の皆さんの防災上の財産でもあるんですけれども、利用とか観光、漁業振興などにも寄与するような本当の地域の財産として、この砂浜が蘇るよう、今後、私ども頑張っていくつもりですので、今後ともご協力、ご指導のほどをよろしくお願いいたします。私からの発表は以上でございます。